

道真Ⅱ 異境での終焉

今泉晴行

MITIZANÉ Les derniers moments au pays étranger

IMAIZUMI, Haruyuki

487. 東山小雪

雪白初冬晩	雪が白く降っている初冬の夕
山青反照前	返照のなか、山は青々と冴え渡っている。
誤雲獨宿礪	孤雲が谷間に漂っているのか、
疑鶴未歸田	白鶴はまだ帰らず田畝に残っているのかと見紛うのは、雪の仕業。
不放行看賞	実際に行ってみて雪を賞でることは、わたしには赦されていない。
無端坐望憐	ここに蟠りを抱え無聊をかこち、情けなく唯だ此処から座視するしかない。
客魂易消滅	旅の空にある魂は、頼りなげではかないもの。
遇境獨依然	折に触れて万感こみあげるも、西の果ての空の下、ただ獨り。

道真のおかれている境遇、心情が明らかにされる。ある程度の自在は許されていたのかもしれないが、完全な自由はなかったことが理解される。

488. 讀家書

消息寂寥三月餘	家人の書簡から三ヶ月余、寂寥極まる日々。
便風吹著一封書	東風が吹いたか、それに乗って一封の書簡。
西門樹被人移去	西門の脇に植えていた樹木は他人に移去され、
北地園教客寄居	北側の園には他人(ひと)が客居していると綴られている。
紙裏生薑稱藥種	紙に生薑(しょうが)を包んで薬種とし、
竹籠昆布記齋儲	竹には昆布を籠めて齋(ものいみ)の食と称す。
不言妻子飢寒苦	妻子はみづからの飢寒を一切語らず、
爲是還愁懊惱余	却ってそれだけに私を不安にし、懊惱させる。

京の留守を守る妻との交情が記され、更に一詩ごとに道真の胸の内が明かさ

れていく。

489. 白微霰

如碎如黏取貌難
被風吹結雪相搏
麿牙米簸聲々脆

龍頷珠投顆々寒

念佛山僧驚舍利
名醫道士怪鉛丸
袖中收拾慙歎見
應是爲氷淚未乾

霰は一方では碎け散り、また一方では黏(ねば)り付く
風に吹き結ばれて雪が相搏(う)つ。
麿(のろ)の牙の如く真っ白い米を箕で簸(ひ)る、さらさらとし
た音、
龍の顎の下にあるという珠を投げるように、一顆一顆寒々とし
ている。

念佛三昧の山寺の僧は、仏舎利かと驚き、
名醫の道士は、丸薬かと眼を擦る。
袖の中に入った霰を簾くと見ると、
わたしの泪が溶けずに氷になったものだ。

心が余所に遊ぶかとみると、やはり鬱屈から離れることはなく、何を見ても
想うのはみづからの境遇。

490. 雪夜思家竹 十二韻

自我忽遷去
此君遠離別
西府興離別
關山消息絕
非唯地乖限
遭逢天慘列
憫默不能眠
紛々專夜雪
近看白屋埋
遙知碧鮮折
家僕早逃散
凌寒誰掃撒
抱直自低迷
含貞空破裂
長者好漁竿
悔不早裁截
短者宜書簡
妬不先編列
提簡且垂竿
我生堪以悅
千万言無效
漣而亦嗚咽

忽然と地位境遇が一変し、遷去してから、
馴染の竹とも遠く離別してしまった。
西の都の客舎と、東の籬を連ねた家の庭と
数多くの関や山が障壁となり、消息が絶々になってしまった。
ただ互いの地が遠く懸絶しているだけではなく、
京とは全く異なる海浜の惨烈な気象に遭際した。
わたしは憂い黙(もだ)し、眠ることさえできず、
終夜、深々と雪は降りつづく。
近くの家屋が雪に白く埋もれ、
遠くに竹竿の折れる音が響く。
家僕は早々と退散している、
誰が寒さを押し掃(はら)い撒(す)てるのか。
一直なところを抱きながら、みづから低く地に迷う。
一徹なまことを貫きながら、空しく破れ裂けてしまう。
長い竹は漁竿に適していただろうに、
悔やまれることに、早く截断していたらと思う。
短い竹ならば書簡にすればいい。
残念なことに竹簡に編み列ねていたらと想う。
竹簡を提げ、竿を垂せる日々であれば、
人生は喜びに満ち溢れていたことであろう。
千万言を費やしても、ただ空しさだけが漂う。
涙は止めどなく流れ、嗚咽涕泣する。

縦不得扶持 例え折れた竹を扶(たす)けることができなくても
 其奈後凋節 凋(しぼ)んでも更に残る屈せぬ節は、どうなるのだろうか。
 落胆悲哀に沈みながらも、まだ一節の意地を保持している。

491. 聴寺鐘 二月十七日

欲識槌鐘報五更 夜更時刻が知りたく思っていると、寺鐘が五更(午前四時)を報せ、
 三塗八難一時驚 三塗の闇に惑う者たちを目覚めさせる。
 大奇春夏秋冬盡 不可思議の極みである。春夏秋冬が尽き果てても、
 爲我終無拔苦聲 我が苦しみを拭い去ってくれる聲が聞こえて来ぬことは。

春秋を重ねても、京からの朗報は届かない。悶々としている道真の心根が顕れる。

492. 元年立春 十二月十九日。

天愍長寒万物凋 天も、自然がいつまでも寒く、万物が荒寥悄然としていることを憐れみ、
 晚冬催立早春朝 晩冬のうちに、既に立春のあしたを急(せ)き立てて来た。
 浅深何水氷猶結 されど深浅を問わず、いづれの川も氷が張り、
 高卑無山雪不消 高低に関わらず、いづれの山も雪を被っている。
 根拔樹慶花思斷 根が抜かれた樹は、花を咲かせるのを断念せざるを得ない。
 骨傷魚豈浪情揺 骨を傷めた魚は、浪の情を揺るがすことができるだろうか。
 偏憑延喜開元曆 ただひたすら延喜と曆が改められたことに想いをかける。
 東北迴頭拜斗杓 東北に頭を向けて北斗の杓星に願いを懸ける。

「頭拜斗杓」、人智を超えた「斗杓」に願いを懸けるしかない道真の姿が垣間見える。

493. 南館夜聞都府禮佛懺悔。

人慚地獄幽冥理 人は地獄幽冥に墮ちる不徳を慚(は)じ、
 我泣天涯放逐鼻 我は地の果てに無辜の俘囚として放逐されたことを泣く。
 佛号遙聞知不得 佛の名号が遠くに聞こえるが、その功德に与る術を知らず、
 發心北向只南無 発心して北に向かい、唯だ南無とだけ唱える。

寄り懸る対象は「斗杓」から、「佛号」となる。

北に位置する観世音寺から風に乗って切れ切れに聞こえてくる「佛号」にむかい、「南無」というしかできることはない。

494. 歳日感懐

故人尋寺去 故い友人が寺を訪ね、そして帰り、
 新歳突門来 新しい歳がまるで門を突くように来た。

鬢倍春初雪	鬢の白さは春の初めの雪よりもずっと白く、
心添臘後灰	年越しに用いた灰をところに添える。
齋盤青葉菜	神に献げる器には青い葉の菜が、
香案白花梅	香炉を載せる机には白梅が置いてある。
合掌観音念	しかし、わたしは合掌して観音に念ずるのみであり、
屠蘇不把杯	屠蘇さえも手にしない。

万策尽きてしまった人間の姿が彷彿する。神道の「神」ではなく、かつて国家護持の宗教であった仏教に寄りかかるしかない。国家護持 だけではなく、すでに 個人救済 の萌しもみえる「現世において衆生の厄難を救い福德を与える菩薩（註1）」である観音に縋る。

495. 梅花

宣風坊北新栽處	宣風坊の北、家に新たに栽えた梅、
仁壽殿西内宴時	仁壽殿の西、内宴の時に愛でた梅。
人是同人梅異樹	梅を見ている人間は同じだが、その見ている梅の樹は異なる。
知花獨笑我多悲	梅花は独り微笑み咲き匂うが、わたしの心には悲しみが溢れている。

496. 奉哭吏部王 故一品親王。

配處蒼天最極西	配謫の地は蒼天の西の果ての極み、
恩情未見阻雲泥	故親王の恩情は天地ほどの隔絶を飛び渡る。
去年眞跡多霑泥	去年頂いた真筆に恩情が溢れこぼれ、
今日飛聞甚慄慄	今日届いた飛報は格別慄(うれ)い慄む。
元老慶無朝位立	元老といわれる人々は、重職には就かず、
林亭只有夜禽棲	林のなかにある瀟洒な亭は、夜禽の栖となる。
世間自此琴聲斷	世間にこれより琴の音は聞こえることはなく、
不獨人啼鬼亦啼	人間ばかりではなく、靈鬼をも悲しませる。

道真自身の愁いの上に親王の「薨去」が重なり、さらに気持ちが重たく鬱ぐ。

497. 種菊

青膚小葉白牙根	緑の茎に小さな葉、白い根、
茅屋前頭近遍軒	茅屋の前庭の軒端に植えた。
將布買來孀婦宅	布との交換で、孀(やもめ)のところから貰った。
與書要得老僧園	書簡を送り、老僧の庭から手に入れることができた。
未會種處思元亮	嘗て菊を植えたが、陶淵明の故事に倣おうとしたわけではない。
爲是花時供世尊	いまこそ花の時、ただ釈尊に供えるためである。
不計悲愁何日死	悲愁に沈むわたしはいつ死に絶えるか判らない。

堆沙作壘荻編垣 土を高くして畝を作り荻を垣に編んだ。

希みが叶うことよりも、「悲愁」のため、「死」が頻りに道真の視野に立ち現れる。

498 . 山僧贈杖、有感題之。

昔思靈壽助衰羸	昔は靈壽木の杖が老衰を支えてくれると思っていた。
豈料樵翁古木枝	老樵が手にする古木の枝を頼りにするなど考えもしなかった。
節目含將空送老	山僧から贈られ手に入れた杖は、節目多く徒に時を経た代物。
刀痕削著半留皮	刀で削り附けた痕があり、半ば皮を残している。
扶持無處遊花月	この杖に助けられて、花月に遊ぶところとてない。
拋棄有時倚竹籬	抛(な)げ棄てて、竹籬に立て掛けている時もある。
万一開眉何事在	万が一、寄せた眉を開くことが有れば、どうなるのだろう。
暫爲馬被小兒騎	この杖も馬となって子供を乗せようものを。

川口久雄氏が「菅家後集」補注497 - 二で、「老僧は誰だかわからないが、政庁を憚って交通するものがなかったなかで、敢えて道真に親しく交わったものもいたであろう。南方三キロには武蔵寺もあった」と記している。もちろん先ほどの詩にみられる唱導の流れ聞こえる観世音寺も間近にあった。

499 . 二月十九日

塚西路北賈人聲	都府楼の西の一塚に物売りの声が聞こえる。
無柳無花不聽鶯	柳もなく 花もなく 鶯も鳴かない
自入春來五十日	暦の上では春に入って五十日が過ぎた。
未知一事動春情	しかし、いまだ何一つわたしの心に春の風は吹かない。

西京に客在すること早や一歳。しかし、道真の上に春の微風が吹くことはない。

500 . 雨夜。 十四韻。

春夜漏非長	春の夜は長くはない。
春雨氣慶暖	春の雨は冷たくはない。
自然多愁者	しかし、愁い多い者は
時令如乖狠	おのずと時の流れに乖(そむ)き狠(もと)る。
心寒雨又寒	心が寒く、雨もまた寒い。
不眠夜不短	眠られなければ、夜は長い。
失膏槁我骨	肌も膏(つや)を失い、骨も槁(か)れる。
添淚澁吾眼	涙が邪魔して、眼はよく見えない。
脚氣與瘡癢	脚氣と瘡癢(ひふやまい)と
垂陰身遍滿	病いの翳が身をあまねく被う。

不啻取諸身	ただ我が身体だけではなく、
屋漏無蓋板	屋根の雨漏りを防ぐ板さえない。
架上濕衣裳	衣紋架けの衣類も濡れており、
篋中損書簡	篋(ふばこ)のなかも濡れ、書簡も傷む。
况復厨兒訴	そのうえ厨房で立ち働く児まで叫ぶ。
竈頭爨煙斷	竈(くど)から炊事の煙が絶々となり消え入りそうだと。
農夫喜有餘	農作業に携わる者は喜び弾むが、
遷客甚煩懣	放謫されて来た余所者には忿懣遣る方なく、
煩懣結胸腸	煩懣が胸につかえ、腸(はらわた)にしこりを遣す。
起飲茶一盞	起きあがり小碗で茶を飲み下そうとするが、
飲了未消磨	飲み干しても胸のつかえや腸のしこりは消え去らない。
燒石溫胃管	暖めた石を胃の腑に置いて温める。
此治遂無驗	こうしてみても効驗(ききめ)はない。
強傾酒半盞	あえて杯半分ほどの酒を飲んでみる。
且念瑠璃光	このうえは薬師瑠璃光如来に縋るしかなく、
念々投丹款	心を空にしてひたすらまことを献げる。
天道之運人	天は人の定めを司るところ、
不一其平担	しかし、万人にひとしなみ一定であるのだろうか。

西行以来一年有余。祈りも希(ねが)いもかなわず、憂悶は心身に深く影を落とし始めている。されど依り頼めるものは「神仏」だけの状態である。

501. 題竹床子 通事李彦環所送

彦環贈與竹繩床	彦環が竹の背凭れ椅子を贈ってくれた。
甚好施來在草堂	草堂に置くのが応分であろうと思う。
慶是商人留別去	この竹椅子は、異国の商人が別れの際に遣していったものと思れる。
自今遷客著相將	今より、配謫された者である私の元に有ることになる。
空心舊爲遙踰海	竹が旧くなっているのは遙か海を踰(こ)えて来たからだろうか。
落淚新如昔植湘	我が涙を受ける竹は、嘗て妃が涙を流したという湘に植えられた竹か。
不費一錢得唐物	一錢も費やさず唐物を得た。
寄身偏愛惜風霜	身の傍らに置き、風霜を経たこの竹椅子をひとえに愛おしんでいこう。

唐の隠者を想い、竹に遊ぼうとするが、鬱屈は、やはり霽れない。

502. 傷野太夫。 古調七言五韻

我今遠傷野太夫	われいま遠く野大夫の死を傷(かな)しむ。
不親不疎不門徒	親しかったわけでもなく、疎かったわけでもなく、

聞昔老農歎農廢
 詩人亦歎道荒蕪
 沈思雖非入神妙
 如太夫者二三無
 紀相公應煩劇務
 自餘時輩愒鴻儒
 况復眞行草書勢
 絶而不繼痛哉乎

また、我が弟子だったわけでもない。
 嘗て年老いた農民が、農が廢れると歎くのを耳にしたことがある。
 詩人もまた文の道が荒むことを歎く。
 深い想いは神妙の域に達しているとはいえないが、
 太夫のような人間は二人とはいえない。
 紀参議は激務に忙殺されているのであろう。
 昨今の人々はみな儒学者である。
 まして楷書、行書、草書の筆勢、その姿を
 継承する者は誰も居ずに、跡絶えてしまうのは遣り切れないことである。

503. 秋夜。

床頭展轉夜深更
 背壁微燈夢不成
 早雁寒蛩聞一種

深更まで、枕に頭を展転と幾度となく寝返りを打っても寝付けず、
 燈を背にしても眠れず、夢も見ることができない。
 早々と訪れた雁、寒々と鳴く蛩(こおろぎ)は一樣で常と変わり
 はない。

唯無童子讀書聲
 童子小男幼字、近會天亡

ただ、幼き我が子の書を読む声だけが聞こえない。
 附註に「童子は男の子の幼名愛称。近来天亡した。」
 と記載されている。

「南館」の東方数百メートルのところの小高い丘がある。その丘の南端に「童子」の墓といわれるものがある。地元で「童子」を供養している人々は、道真の「童子」「隈磨」の墓と呼び習わしている。元来墓は小丘の麓にあったと伝承されている。道真にとって、その小丘は「童子」の死を表徴するものであり、小丘を眼にする度ごとに「童子」を想い起こさざるを得なかったと考えられる。明け暮れこの丘が目に入らなかったわけではなく、眼にする度に込み上げてくるものを禁じ得なかったことと思われる。

「遷客」の境遇で、身内の者を喪うことは、一段と心が鬱(ふさ)がれることである。道真の気質性分から、文字通りみづからの手足を奪われた以上の痛手であり、一層心身が蝕まれていったことと思われる。

504. 官舎幽趣。 六韻。

墉中不得避諠譁
 遇境幽閑自足誇
 秋雨濕庭潮落地
 暮煙縈屋潤深家

墉内である街なかでは、喧噪を避けることができないが、
 この場所の閑静なたたずまいは、誇るに足るものである。
 秋の雨は庭を濕おし、潮の引いた後の地面のようだ。
 家の廻りを夕靄が縈(めぐ)り覆う。なんと湿度を帯びた家屋なのか。

此時傲吏思莊叟
 隨處空王事尺迦

いま思う。驕り高ぶった官吏は莊子のことを考えているのかもしれない。
 あらゆる時も、いかなる処においても、ただ釈迦に仕えよう。

依病扶持藜舊杖	病による衰えを助けてくれる藜の杖も古びてしまった。
忘愁吟詠菊殘花	愁いを打ち払って残菊を吟詠する。
食支月俸恩無極	嘗て、月俸で殮(ゆうげ)を喰むことができたことは限りなく恩深いこと。
衣苦風寒分有涯	今般の配謫の身には風の寒さにも苦しい。
忘却是身偏用意	この身を忘れて思い巡らせると、
優於誼舎在長沙	かの誼という男が配謫された居所が長砂であったことを思えばまだ自分などは幸せといわなければならないのか。

「南館」跡と伝承、推定されている現在の「榎社」の立て替えの時、社殿の北側に側溝とみられるものが発掘されている。

505. 秋晚題白菊

涼秋月盡早霜初	初秋の月の終わりに早霜が降り、
殘菊白花雪不如	残り菊の花の白さには雪も及ばない。
老眼愁看何妄想	憂いに病み衰えた老いの眼は如何なる幻想をみるのか。
王弘酒使便留居	王弘の如き酒を持参するような使いなら、留めて置きたいものだ。

506. 晚望東山遠寺

秋日閑因反照看	秋の日、閑かに夕暮れ前の反照のなか、想う。
華堂插著白雲端	華やかな仏堂の屋根の反りが白雲に連なっているかのようだ。
微々寄送鐘風響	微かに風が送る鐘の音、
略々分張塔露盤	塔の頂にある承露盤もくっきりと鮮明に見える。
未得香花親供養	香花はみづからを供養することはできない。
偏將水月苦空觀	水に映る月のように、ひたすら一切は空である。
佛無來去無前後	佛は來ることなく、去ることなく、前も後ろもない。
唯願拔除我障難	ただ希(ねが)う、わたしの障難を抜き去ってくださることを。

表題に「東山遠寺」と作者がことわっているように、やはり東方に位置する寺院、都府楼の南、おおよそ八百メートルに般若寺跡と同定される古代寺院跡がある。現在も鎌倉時代に建立された七重塔が現存している。発掘調査の結果、八世紀前後の土器類が出土している。また、聖徳太子の「上宮聖徳法王帝説」の裏書きには、645年に蘇我日向が孝徳天皇の冥福を祈って建立したと記されている。元來建立されたのは、現在地よりさらに南西に一キロほどに位置する「塔原廢寺」の場所であり、奈良時代に現在の朱雀に移転したとの説もある。いずれにしる道真の配流時には塔も見られたことであろう。

また、道真の心中も「佛」への帰依が愈々深まり、《現状》を乗り越えるために、「空」の悟りに向おうとしているかに見える。

507. 風雨

朝々風氣勁	朝、朝、風が強く、
夜々雨聲寒	夜、夜、雨が寒い。
老僕要綿切	老僕は綿入れを切に求めるが、
荒村買炭難	荒れたる村では炭を手に入れることさえ難しい。
不愁茅屋破	茅屋の廃れていることは苦にはならないが、
偏惜菊花殘	偏(ひとえ)に菊花が風雨に損なわれることが惜しまれる。
自有年豊稔	近年には豊作の歳も有ったであろうに、
都無叶口食	ひとが口にできる作物もない。

燈滅二絶。

508. 脂膏先盡不因風

風の所為ではなく、脂(あぶら)が尽きた故に、燈が灯(とも)せない。

殊恨光無一夜通
難得灰心兼晦迹

殊に残念なのは、夜もすがら燈が灯せないことだ。
また心を灰にすることもできず、世から隠れ住むこともできない。

寒窓起就月明中

寒中 月が冴え冴えと照らすなか、窓辺に立つ。

509. 秋天未雪地無螢

秋の空にはまだ雪は降らず、地には螢の光もない。

燈滅拋書淚暗零

燈は消えて書を抛(なげう)ち、
涙がおのづから暗(むな)しく溢れ落ちる。

遷客悲愁陰夜倍

遷客の悲愁は、暗夜にいや増し、

冥々理欲訴冥々

人知を越えた冥々の理(ことわり)を、天に求め訴えたい。

510. 問秋月

度春度夏只今秋

春を過ぎ、夏を度(わた)り、いまは秋。

如鏡如環本是鈎

月は、鏡のように環のように見えるが、初まりは糸のような鈎。

爲問未會告終始

それ故、問いかけたい。何故、終わりがいいのかと。

被浮雲掩向西流

ただ浮き雲に掩(おお)われて、西に向かい流されて行く。

511. 代月答

萸發桂香半且圓

萸(あざ)が花開き桂が香しく、月半ば圓かになろうとしている。

三千世界一周天

三千世界を一巡りする天。

天廻玄鑑雲將霽

天意がはたらき、雲を霽(は)れさせようとしている。

唯是西行不左遷

ただ月が西に行くことは、左遷ではない。

道真にとって二回目の秋、最後の秋。「自然」を詠み、そのなかに自己の来し方行く末をみている。当然のことながら、深く心に突き刺さった棘は如何とも仕難い。

512. 九月盡

今日二年九月盡	延喜二年九月晦日。
此身五十八迴秋	我が身五十八回目の秋。
思量何事 中庭立	何事を思い量り、中庭に立っているのか。
黄菊残花 白髪頭	黄菊、残花、白髪頭。

513. 偶作

病迫衰老到	衰老に到った我を、病は更に追いかけて、
愁趁謫居來	愁いは謫居を重く塞ぐ。
此賊逃無處	この賊から逃れる術はない。
觀音念一迴	ただひたすら觀音に念ずるのみ。

514. 謫居春雪

盈城溢郭幾梅花	謫所に雪が降り、都府楼に梅の花が咲き乱れているようだ。
猶是風光早歳華	これは風光がもたらす早歳の華。
雁足黏將疑繫帛	雁の足に残雪が黏(ねば)り、書簡の帛を繫(か)けている様である。
鳥頭點著思歸家	鳥の頭に白雪が點を差し、京の家に帰ることができたらと切に想う。

絶筆になった「514. 謫居春雪」では、中国の故事を踏まえたものである蘇武と嚙丹の二つの懐郷の故事が重ねあわせられ、自己の望郷を浮かび上がらせている。

曆では立春を過ぎ、光は既に《春》、しかし風は冷たく現実の気象状態は冬。これは道真の心情を象徴的に物語る。道真の心象風景は真《冬》、微妙な大気の変化が道真の日常を更に辛いものになっているのかもしれない。夢想的《願望》と冷厳な動かし難い《現実》。そして、その現実からの強い脱離願望を窺うことができる。

ひとはだれでも、「冤罪」で拘留状態にあると、その「冤罪」の起こり来た事象への潔白の明証、現身の原状復帰とを念願することは論を俟たない。当然ながら道真にもそれが強く見られる。「無幸」の罪人として抑留状態に置かれた人間は、あらゆる手段を用いてみづからの清廉潔白を証しようとすると考えられるが、しかし道真に関しては、積極的に働きかけた気配は感じられない。時代的な諸要素もあろうが、道真自身の個人的な性向性情も大きく作用していると思われる。また、それに強く影響を与えた道真の生育環境も大きく弱をなしていると考えられる。代々「我儒者(417「詠樂天北窓三友」)の家系であり、幼少の折から勉学を半ば強要され、そして、他を抜きんできた優秀さを誇っていた道真。その過程で多少の確執や妬みを買うことがあっても、また学儒学生の間で互いに鎬を削ることはあっても、道真自身の生育環境の中では、権謀術策、詐略の世界とは余り縁がなかったことと思われる。加えて、道真は、現実を切り劈く「政」の人ではなく天性の「詩」の人であったと言えよう。

そして、「謫落」された後も最期に到るまで、あくまで痛々しいほど学儒としての「忠」でありつづけようとした。以下の古くから人口に膾炙している

「去年今夜待清涼
秋思詩篇獨斷腸

恩賜御衣今在此
捧持毎日拜餘香」

をみても、「察我無辜」、ひたすら「歸郷」することを考えていた。しかし、宇多法王が道真のために動いた形跡は見られない。

II. 道真と子

岩波書店「日本古典文學体系 72 菅家文草 菅家後集」に割り振られた通し番号503以降は、表題503「秋夜」を見ても明らかなように、客死する半歳前の作品である。502 以前に用いられている詞句とは様相を一変させ、死の予感、気配が漂う凄絶な詞句が並ぶ。まず「秋夜」の最終句は「唯無童子讀書聲」、空飛ぶ雁、寒さを告げる蝨(コオロギ)も去年と同じく普段通りだが、いつも聞こえる男の子の書を読む声だけが聞こえない、とある。道真には前に子息を亡くした経験があった。その時に作った117「夢阿満」がある。

阿満亡來夜不眠 偶眠夢遇涕漣々
身長去夏餘三尺 齒立今春可七年
従事請知人子道 讀書諳誦帝京篇 初讀賓王古意篇。
藥治沈痛纔旬日 風引遊魂是九泉 以下 略

ここに道真の心境を垣間見ることができる。童子が夭亡したときは、阿満が亡くなったとき以上の衝撃が道真に与えられたであろうと推測される。いうまでもなく、阿満が亡くなったのは配謫時ではなく、道真自身が京の地で順風満帆な状態の時であり、加えて、一族も四分五裂した孤憂に沈んだ事態ではなかった。太宰府の地で隈麿と伝承されている、その童子の墓と伝えられる小高い丘は、謫居の真東に有り、それを道真は折に触れ庭から望見していたはずである。

阿満の時も確かに辛かったであろうが、謫地ではなく京の我が家でのことであり、当時も道真自身に様々な思い煩いはなかったわけではないだろうが、深憂を共にしてくれる連れ合いも居たし、多くはなかったであろうが心を許せる友人も傍に幾人も居た。しかし、童子を亡くした時は天涯孤独であり、痛みを分け合うどころか、他の一人の幼き女子の悲しみさえ引き受けなければならなかった。その女子は、道真の死後、太宰府の地を離れ、道真の長子「尚書右丞」高視が左降された土佐に向かったという伝承が残っている。

道真は配謫の地で《我が憂い》を漏らすことができるものを人間世界には見出せず、「隨處空王事尺迦」(同 504 官舎幽趣)となるのは至極当然であり、以後更に「佛無來去無前後、唯願拔除我難障」(同 506 晚望東山遠寺)となり、ひたすら佛・釈迦に対する傾斜が激しくなっていく。前に述べたように、東方には隈麿と言いつた「童子」の墓が眼に入ったであろう事は疑えず、「寒窓起就月明中」(燈滅二絶 同 508)に言うように、凍てついた「寒窓」から冴えた月の光の裡に道真が見たものは何であつただろうか。そして、「燈滅拋書淚暗零 遷客悲愁陰夜倍」(燈滅二絶 同 509) だれ一人、我が悲愁を語り合うひとの居ない孤絶した道真の夜は苦痛に満ちたものであり、「冥々理欲訴冥々」しかない。かくして道真の仏教に対する帰依は一層深まり、「三千世界一周天 天廻玄鑑雲將霽」(同 511 代月答) いくつか自分の雲霧も霽(は)れてほしいという祈りになる。

また、語り合うことができるのが《ひと》ではなく、月であるというのは凄愴というしかない。「此身五十八廻秋 思量何事中庭立」(同 511 代月答) 中庭に立ち、道真は何を思量していたのか。生涯に互る様々な出来事が脳裏を去来し、万感が込み上げ溢れていたことであろう。この詞句までが秋の

作と思われる。逝去する六ヶ月前の詩作である。この秋には「秋夜」から「九月盡」まで十作の詞句が遺されている。しかし、以降の最期の半歳のあいだには、絶筆となる「謫居春雪」を除いて一作しかない。それは「偶作」と題された詞句で、道真には「老」の他に「病」まで覆い被さって来たなかで記されたものである。踵を接して憂いや悲しみが謫居に押しかけてくる。彼に残されている賊(あだ)は逃れようにも逃れる事のできない《死》であり、叶うことはひたすら観音に縋ることだけである。この詞句に記されている言い回しは、文学的な技巧上の修辞としてだけではなく、当人の実際の身体の衰弱を感知して用いられていることと思われる。何故ならば、この時期の作品数がこれまでの一年半に比し格段に減少しているということからも、心身共に衰弱して、机前に坐すことさえできなくなっていたのかもしれない道真の姿がうかがわれるからである。

絶筆に記されている悲痛な望郷の念をいただきながら、詩を創るしかなく、そして遂にその唯一の術さえ奪われて、鬱屈を沸き溢れるほど抱えながら、道真は異土に埋もれてしまった。

道真の日本文学史上における評価として、「菅家文草 菅家後集」の校注をした川口久雄氏は、本集の解説で

「わが歴史の曙から九世紀半ばにいたるこの列島社会にうつけられた文化的教養の総量が凝縮して彼の上に結晶」し「日本的美意識の性格の諸相を解く鍵はこの道真詩のなかにそっくりある」(p.52)

と述べている。また、同文の中で、

「福原麟太郎博士はエリオットを引いて、ことばの大切さ、ことばの修練を経て『とらえ得なかったものをとらえ、作り得なかった形を作っていく。文学というのはそれだ』(「文学と文明」)といわれる。道真は晴れるとき、おおよけのときには、これまで日本文学にみることのできなかつた繊細妖艶を極めた美の世界をことばで構築してみせた。わたくしのとき、ひとりのときには、人間の奥底にひそむやむにやまれぬ名付けがたいものに肉薄して、これに表現を与えた。彼はわが文学史の上で、和漢ふたつの領域に出入した、まれにみることばの魔術師であり、ことばの格闘者であった。彼の作品における和習そのものが、ある意味ではかかる道筋の軌跡ともいえよう。彼は日本人の言語表現の能力の振幅をひろげ、多様さと豊かさをもたらした。感情の微妙さ、繊細な顫動とてりかげりを自由に表現する技術と語法をきりひらいた。」(上掲書p.81)

と評価している。

また詩人でもある大岡真氏は、詩の実作者として次のように記している。

「道真というひとは修辞に心を砕いている詩のなかでも、どこかいつも孤独で傷つきやすい魂であることを感じさせる場合が多いように思われます。」(大岡真 著 「詩人・菅原道真」 p.74)

指摘されるような魂を具備した道真は、公の奉仕の具として漢詩文を残したが、それだけではなく道真にとって、それを創作すること事体が自己の生存のためには必要不可欠なものであった。「ことばの魔術師」といわれるが、道真のうめき、あえぎ、苦悶が自然に表出したにすぎず、漢詩文は道真の呻吟の表徴といえるのかもしれない。

また大岡真氏は、以下のように語る。

「詩は根本において述志であり、訴えであり、呼びかけであり、祈りでさえもある」

(同 p.160)

「彼の陥っていた八方ふさがりの非条理な状況を、辛うじて文字を連ねることによって切り裂き、一瞬でもいい、より広い、より呼吸しやすい心的空間をわがものとするために、それらの修辞、それらの観念を、その述志のための必至必然の表現手段として用いた。」(同 p.163)

「後集」を通観して先ず気になるのは、無防備とも言える素直な道真の感情の表出である。上に引用した両氏は、巻七に集録されている「書齋記」(同526)に関して、一度読んだだけでも、「ひとつの人間のタイプ - 派閥で動くボス型ではなく、誠実な真面目な考えるひと」、「どちらかという人間嫌いのくせに名利から離れられない我執の念も相当な人間像がうかがわれる。調和的たろうとつとめる孤立型の人物、抵抗的よりも諦念的で、むしろ能動的でなく受動的」、「少々涙が過剰」(「菅家文草 菅家後集」解説 p.39~40)と分析している。また、大岡真氏は「自負心と狷介な性格」を指摘している。確かに「唯知我者、有其人三許人」と冷徹な認識ができる人間でありながら、同時に溢れるような感情を持ち余す面も具えていたことがうかがわれる。

幾度か京に帰ったとはいえ旅愁を感じながら讃岐に四年在住して中央政界に復帰した時のように、太宰府での生活を情動に心身を蝕まされるのにまかせるよりもしたたかに再起を待つための刻にはできなかつたのだろうか、と後代の人間は悔やむかもしれない。しかし、讃岐時代とは異なり、配謫時の五十八歳は十分に老境であろうし、数少ない親友紀長谷雄の一説に伝えられる配謫の折の対応を見ても理解できるように、復帰のための方策を企るにしてしても、往時の政治情勢ではその可能性は少なかったであろうと推察される。また道真の生来の気性は、政治家と言うよりは寧ろ本質的に「筆に生きる人」であり、何よりも真の「詩」人であった。

以下 次号。

